

【報告 3】

日本におけるオーラルヒストリーの展開と課題 Development and Issues of Oral History in Japan

蘭 信三
ARARAGI Shinzo

1. はじめに

(1) JOHA20 周年記念シンポジウムのねらい

コロナ禍でのハイブリッド形式ではありましたが、韓国の尹澤林先生、台湾の許雪姬先生にご登壇いただき、『東アジアにおけるオーラルヒストリーの展開と課題』という国際シンポジウムが開催できましたことは、企画者の一人として感無量でした。尹先生とは初対面ですが、司会の李洪章先生から、尹先生が韓国の口述史（オーラルヒストリー）をリードされてきたことを教えてもらってきました。また、許先生には 20 年ほど前に台北の中央研究院をお訪ねしお目にかかったことがありましたが、それ以来先生の台湾における満洲引揚者研究に多くを学んでおります。2021 年に刊行された『離散と回帰』には大変な感銘を覚えまし、許先生が台湾の口述史（オーラルヒストリー）を牽引されてきたのは周知のことです。そして大会当日も、お二人の刺激的な報告から多くを学ばせていただきました。このような先生方とこの記念すべきシンポジウムの場にともに登壇できたことは、私にとって大変名誉なことでした。本シンポジウムを主催していただいた日本オーラル・ヒストリー学会と、ご登壇いただいたお二人の先生方に心から感謝申し上げます。

さて、開催の挨拶で李先生が述べられたように、本シンポジウムは日本オーラル・ヒストリー学会（以下、JOHA）設立 20 周年を記念しての、東アジアにおけるオーラルヒストリーをめぐるシンポジウムです。ご承知のように、東アジアにおけるオーラルヒストリー／口述史研究は 1991 年の冷戦崩壊前後から大きく展開し、それぞれの歴史的状況を踏まえた独特の展開を果たしてきましたし、相互に深い関連を持っているものと理解できます。と申しますのも、日韓台ともに英米のオーラルヒストリーを介したグローバルな方法論が共有されてきたからです。しかも、20 世紀東アジアの歴史がそもそも相互に密接な関連があったからでもあります。このため、たとえば、日本軍「慰安婦」問題は共通の重要なテーマでし、第二次世界大戦後の人の移動に関する研究などでも相互に密接に協力したり、関連した聞き取りがなされたりと、強い関連があったからです。

しかしながら、これまで個々の共同研究などにはありましたが、学会レベルでの公的な交流は十分ではありませんでした。そこで、本シンポジウムでは、東アジアにおけるオーラルヒストリーを代表する先生方を招待し、東アジアにおけるオーラルヒストリーの歴史と課題について互いに学び合い、そして今後の研究交流の促進を図ることを目指しています。

(2) 共催「東アジアのポストコロニアルを聞きとる」

JOHA を代表しまして私が登壇しますが、それは私が日本のオーラルヒストリー研究を代表する研究者というよりも、本シンポジウムの共催者である「東アジアのポストコロニアルを聞きとる」という科研費プロジェクトの研究代表者だからです。その点、ご了解ください。なお、お二人の東アジアを代表する先生をお招きしていることもあり、私の報告は、「東アジアのポストコロニアルを聞きとる」という視点を意識した報告が中心となります。この点も、ご理解のほどよろしく願いいたします。

(3) 報告の概要

さて、詳細な報告に入る前に、私の報告のポイントをあらかじめ短く紹介します。

まず、第一に、20 世紀から現在までの日本におけるオーラルヒストリーの系譜とその展開を簡潔に紹介します。とりわけ、戦後の「民衆のオーラルヒストリー」の展開、なかでも女性による女性への聞き取りという「女性のオーラルヒストリー」という歴史実践、在日朝鮮人や引揚者などの東アジアのポストコロニアルに関連した人々への聞き取りをクローズアップします。第二に、日本のオーラルヒストリーは主に歴史学、社会学において展開されましたが、それぞれにおけるオーラルヒストリーへのスタンスや方法論が異なっていました。それを構築主義へのポジショナリティと「歴史と記憶」論争から紹介します。最後に、東アジアにおける学会レベルの学术交流と「東アジアオーラルヒストリーの交流とアーカイブ」構築の必要性と可能性について提案します。

また、あらかじめ断っておきますが、以上の三点を詳しく報告する際に、私自身の研究も関連させて報告します。と言いますのも、オーラルヒストリーは語り手だけでなく聞き手がとても重要であります。本シンポジウムにおいても、報告者がどのような人びとから、どのようにオーラルヒストリーを聞き取り、研究してきたは欠かせない要素の一つだからです。それに、桜井厚や大門正克をはじめとする JOHA を創成し代表してきた先達を前に恐縮ですが、私も、日本のオーラルヒストリーが展開する重要な時代をとともに生きてきた一人でもあるからです。

2. 画期としての 2002 年

本章では、まずオーラルヒストリーの展開の導入として、2002 年という年の意味について紹介します。ついで、「公人のオーラルヒストリー」と「民衆のオーラルヒストリー」という二つの系譜、そして、本報告における方法論的な着目点について簡潔にのべます。

(1) 画期としての 2002 年

今から 20 年前の 2002 年は日本のオーラルヒストリーにとって「画期」的な年でした。というのも、桜井厚『インタビューの社会学』と御厨貴『オーラル・ヒストリー』、そしてポール・トンブソン[酒井順子訳]『記憶から歴史へ』[原著 1978 年]という 3 冊がすべてこの年に刊行されたからです。しかも、その年に日本オーラル・ヒストリー学会 (JOHA) 発足の準備が本格化し、翌 2003 年に JOHA が設立されたのです。周知のように、この 3 冊と JOHA の発足は、日本におけるオーラル

ヒストリーという研究／歴史実践の展開に決定的な役割を果たし、歴史学や社会学や政治史を越え、多様な研究領域に強い影響を及ぼしたのです。

まず、この点を確認して、その前後のオーラルヒストリーの展開について報告していきます。

(2) 「公人のオーラルヒストリー」と「民衆のオーラルヒストリー」

もちろん、このような画期は一朝一夕でもたらされたわけではありません。1950年代からの政治史や歴史学における「公人」への聞き取りの活性化、何よりも戦後から今日までの地域女性史による地道な歴史実践、80年前後の社会学における生活史法の復権、そして80年代半ばの歴史学研究会を中心とする方法論的な検討のなかで、それは準備されていきました。

これら戦後の長いオーラルヒストリーの歴史において様々な研究が展開されましたが、それらは主に二つのオーラルヒストリーによって代表されると言えましょう。すなわち、御厨貴や伊藤隆等が主導する政治史等による歴史の表舞台を生きた政治家や高級官僚などいわゆる「公人」への聞き取りと、歴史学や社会学や市民によるそれまで歴史学等では関心が払われてこなかった一般の民衆、すなわち農民、労働者、女性、マイノリティ等々、への聞き取りです。前者を、御厨貴にならって「公人のオーラルヒストリー」と呼ぶなら、後者は「民衆のオーラルヒストリー」と呼ぶことができましょう。

このように、日本のオーラルヒストリーの展開には、「公人のオーラルヒストリー」と「民衆のオーラルヒストリー」という二つの大きな系譜がありましたが、本学会（JOHA）は後者を中心とする研究者／歴史実践者の集まりですし、ポール・トンプソンを代表とする世界的なオーラルヒストリーの潮流は民衆への注目という「下からの歴史」や「民衆の歴史」の文脈にオーラルヒストリーはあるものとされていますから、報告時間の制約もありますし、本報告では「民衆のオーラルヒストリー」を中心として報告いたします。そのため、方法論的な議論も、主に歴史学と社会学におけるそれを中心として検討し、政治史による「公人のオーラルヒストリー」に関しては限定的に紹介するのみにしますので、どうかご了承ください。

(3) 本報告の方法論的着眼点

オーラルヒストリーは、「だれが語るか」という問題とともに、「誰がどのように聞き取るか」が大きなポイントです。なによりも、「聞き手の登場」は大きな社会的意味があります。沈黙していた人びとが語れるようになるためには、聞き手の登場が欠かせないからです。

もちろん、「公人」が語るか「民衆」が語るか、聞き手はどのような問題意識でそれを聞き取るか、それを史資料の補完的資料とするか語られた経験を主な考察対象とするか、語りを歴史的証言とみなすか、語りを相互作用によって可変的なものとみるか、「あのとき・あそこ」での（生の）体験と「いま・ここ」で語られる際の経験をどう位置づけるか、等々の方法論的な検討が欠かせません。ですが、本報告では、時間の制約もあり、方法論的な議論は大きなポイントのみに絞っていきます。

なお、本報告は、蘭〔2015〕に準拠し、日本におけるオーラルヒストリーの展開を、第二次世界大戦後から1960年代までをオーラルヒストリーの前史（第一期）、1970年代から1990年代を復興期（第二期）、2000年代以降を成熟期（第三期）という時代区分にもとづいて概観します。

また、ここでは口述によって述べられた人びとの歴史を聞き取り、それを口述に忠実に文字化し

たり（聞き書き）、論文化する行為を総称してオーラルヒストリーと呼びます。研究者の方法論的視座からオーラルヒストリー、生活史、ライフヒストリー、ライフストーリーという呼び方がなされますが、それらをすべてここではオーラルヒストリーの名のもとに対象とします。文脈で使い分けておりますが、それらは対象とする研究や研究者のスタンスに沿って使用していきます。対象とする研究・研究者のスタンスと、報告者である私のスタンスとが混在しないように気をつけていますが、完璧ではないかもしれません。疑問点・批判点がありましたら総合討論の場でご教示ください。以上、ご了承くださいますようお願いいたします。

3. オーラルヒストリーの前史（第一期）

(1) 「下からの歴史」とオーラルヒストリーの〈復権〉

欧米の歴史学では 60 年代に社会史研究が始まり、「下からの歴史」やオーラルヒストリーが復権します。ちょうどその頃、欧米の社会学でもグランドセオリー批判が始まり、ミクロソシオロジーが展開され、歴史研究も見直されます。オーラルヒストリーでもっとも著名なイギリスのポール・トンプソンが言いますように、第二次世界大戦後、60 年代から 70 年代にかけて「豊かな労働者」が登場し、イギリス社会が大きく変化するなかで社会史研究は生まれたと言います [P・トンプソン 1978=2002]。もう一つ、彼は歴史学者ですが、社会学部に配属されたことからオーラルヒストリー研究を展開しました。70 年代のイギリスで社会学と歴史学の出会いがあって、そこでオーラルヒストリーは〈復権〉したのです。

第二次世界大戦を経た 60 年代、70 年代は様々な意味でヨーロッパは変化していき、アメリカでも社会批判、社会運動が出てきます。そのなかで政治や経済を中心とする歴史から、民衆の歴史や「下からの歴史」という視点が強くなり、社会史がクローズアップされました。それが、今日のオーラルヒストリーの世界的な隆盛、一般化の先駆けとなったことをここで確認します。

日本においても、少し遅れて 70 年代にこのような動きが共有されていきます。ただ、その前史ともいえる戦後から 60 年代までの動きは日本独自のものとして重要ですので、まずそこから見ていきます。

(2) 「公人のオーラルヒストリー」の先駆け

まず、宮田節子らの朝鮮近代史資料研究会を取りあげます。同会は 1957 年から朝鮮総督府の元官僚を主な対象とし、10 余年間で 400 回程という膨大なインタビューを行い、朝鮮近代、朝鮮統治に関する口述資料集である友邦協会編『朝鮮近代資料集成』（全 4 巻）をものしました。また、辻村明らが 1963 年から始めた内政史研究会は、旧内務省関係者を対象とし、1963 年から 78 年までの 16 年間、66 人に 269 回ものインタビューを重ねました。これらは、朝鮮統治・内務省といった戦後日本社会の公的な記憶（public memory）から抑圧されてきた植民地支配や戦前体制や戦争遂行に重要な役割を果たしたエリート層から聞き取るという、いわば「公人のオーラルヒストリー」の先駆けでした。注目すべきは、それらは聞き取りが記録されただけでなく、アーカイブ化され、今日の「公人のオーラルヒストリー」の基本的スタイルのモデルをなしていたことです。

(3) 「民衆のオーラルヒストリー」の先駆け

この期で注目すべきもう一つの礎は、1966年から72年に進められた「むくげの会」による在日朝鮮人女性への聞き取りです。これは日本人女性によって聞き取られ、『身世打鈴——在日朝鮮女性の半生』[1972]に結実されました。これは、在日朝鮮人という民族的マイノリティを支えて生きてきた女性たちの経験を聞き取り、「語り口を生かした」聞き書きの持ち味を存分に示した味わい深い作品となっています。

この時期は日韓基本条約（1965年）が締結され、日韓の国交が正常化し韓国籍となった人びとの祖国への一時帰国が実現するようになりました。その反面、朝鮮民主主義人民共和国（北朝鮮）への帰国事業が1959年から展開された時期でもありました。在日朝鮮人社会の祖国をめぐる難しい時期に女性たちの体験が聞き取られたのですが、そのような歴史背景にありながら、その経験が淡々と聞き書きとして残されました。

大門正克が指摘していますように〔大門2017〕、そして「むくげの会」の活動が示しますように、この期のオーラルヒストリーの特徴の一つは「女性が女性の経験を聞きとる」（女性の、女性による、女性のためのオーラルヒストリー）という歴史実践です。と言いますのも、戦後日本社会の民主化の目玉の一つが婦人参政権にありました。戦前の軍国主義や家父長制を反省しつつ戦後民主主義の在り方や女性の自立した生き方をさぐるために、生活運動、綴り方運動、サークル村活動、等々という歴史実践としてのオーラルヒストリーが試行錯誤されていきましたが〔倉敷2009〕、その系譜をひいて今日までも継続されている活動の一つに地域女性史によるオーラルヒストリーがあります。地域女性史研究会は、1950年代に発足し70年代80年代に全国各地で活性化していましたが、そこでの聞き書きの比重は大きく、女性運動の活動家、労働者、紡績女工、屯田兵家族の女性、アイヌの女性等々への聞き取りから、従来の通説を書き直すという〈事実探求型のリカバリー・ヒストリー〉という歴史実践でした〔伊藤2013〕。

そして、この活動こそがJOHA発足の源流となっていることは忘れてならない点です。

(4) 先駆的オーラルヒストリーの切り拓いたもの

1) 補完としてのオーラルヒストリー

まとめますと、この期のオーラルヒストリーは、公的な記憶から抑圧されてきた植民地統治、戦前体制、戦争遂行に重要な役割を果たしてきたエリートの記憶や、従来は捨象されてきた庶民、とりわけ女性の記憶を掘り起こす〈事実探求型のリカバリー・ヒストリー〉として、貴重な役割を果たしました。その基本的な視点は、史資料の欠損を埋めるために行われ、語られた口述資料の資料的な価値は他の史資料と照合されて初めて価値のある「証言」として確認されるという、いわゆる素朴実証主義的なものでした。この期を代表する姜徳相は、オーラルヒストリーの重要性は認められるものの、歴史学にとっては文献が第一でオーラルヒストリーは二次的で、それは文献資料を補完する意味において貴重であり、史料批判が欠かせないと指摘しています〔姜2006〕。

2) 「女性のオーラルヒストリー」という歴史実践

もう一つの特徴は、先にも述べたように、「女性のオーラルヒストリー」です。たとえば、「むくげの会」は女性の、とりわけ二重の抑圧を受けてきた民族的マイノリティである在日朝鮮人女性の経験を聞き取ることでその新しい潮流を準備しました。聞き取りの主体の多くが市民であり女性で

したが、女性からの聞き取りによって、エリート男性による大文字の歴史からではなく、身近で語られた歴史から同じ地域で生きる、同じ女性である自分の人生と関わらせて学び直すことによって〈歴史をわがもの〉としていきました。まさに、〈女性の、女性による、女性たちのため〉のオーラルヒストリーを通した新たな歴史実践の獲得と言えましょう〔折井 2011〕。

このような市民（民衆）による歴史実践は、沖縄戦や原爆被爆者への聞き取り等とともに、P・トンプソンが重視するオーラルヒストリー・コミュニティ・プロジェクトのまさに日本版のパイオニアと言えるものでした。これらは、80年代以降の日本におけるオーラルヒストリーの復権〈第二段階へのステップ〉を先取りするものであり、英米におけるオーラルヒストリーの革新期とほぼ同時期に展開された活動であったことは、銘記すべきことです。

3) 時代状況という規定性

オーラルヒストリーは、だれが語るかとともに、誰がどのように聞き取るかももうひとつの大きなポイントです。なによりも、「聞き手の登場」には大きな社会的意味があります。沈黙していた人々が語れるようになるためには、語りだすためには、語りを許容する時代の変化とともに、それを象徴する「聞き手の登場」が欠かせないからです。たとえば、1991年8月14日の元日本軍「慰安婦」であった金学順さんが長い沈黙を破ってカミングアウトし、歴史を大きく変えました。がしかし、それに先立って「聞き手」としての韓国のフェミニストたちの登場がもう一つの決定的な要素でした〔上野 1997〕。

その意味で、韓国や台湾におけるオーラルヒストリーの展開において、1987年の民主化はオーラルヒストリーに転機をもたらした歴史的出来事でした。民主化によって「聞き手」が登場し、沈黙していた語り手の語りを促し、聞き取りが実現していったと理解できましょう。

同様に、日本の場合も第二次世界大戦における敗戦とその後の「民主化」が決定的に重要で、それに伴う聞き取りには目覚ましいものがありました。それは、人びとが、なぜ無謀な戦争が展開されたのか、戦争で兵隊や庶民はどのような経験をしたのか、戦後をどのように切り開こうとするのか、等々という問題意識を持ち、民衆の戦前体験、戦争体験そして戦後体験や、かつての政治指導者や高級官僚の体験を聞き取る研究者や市民が登場してきたからです。戦後すぐから人びとの戦争体験などへの関心が高まり、オーラルヒストリーが準備されていきました。

しかし、韓国や台湾と日本の違いは、オーラルヒストリーへのアカデミズムの評価の違いでした。敗戦後の日本における「民主化」は米国によってもたらされましたように、戦後のアカデミズムも戦前への反省と当時の米国アカデミズムによる影響を受け、戦後日本の歴史学や社会学においても科学主義が基調となり、オーラルヒストリーは資料としての客観性に問題があるとみなされ、それは文献史学や農村調査等において、〈補助的で補完的なもの〉という位置づけでした。

4. オーラルヒストリーの〈復権〉と〈継承〉（第二期）

(1) 第二期の特徴

戦後日本のオーラルヒストリーにおける第一期から第二期へという新たな胎動は、世界的な潮流から少し遅れて80年代に生じ、90年代に歴史学、社会学、人類学、心理学において本格化しまし

た。そしてそれは 21 世紀になり言語学、政策史、労働史、経営史、科学技術史、日本語教育等々という多様な研究領域を巻き込んだ学際的な潮流となり、オーラルヒストリーはその復権（第二段階）から深化（第三段階）へといっきに展開していきました。もちろん、それとともに先駆的オーラルヒストリーの伝統を受け継ぎ、オーラルヒストリーの復権に刺激された政治史による「公人のオーラルヒストリー」の発展という継続的な大きな潮流もあり、いわば〈復権と継承〉という二つの動きがこの期のオーラルヒストリーの展開事情と言えましょう。

（2）歴史学におけるオーラルヒストリーの〈復権〉

この期の歴史学では中村政則 [1976]『労働者と農民』、安田常雄 [1979]『日本ファシズムと民衆運動』という社会史的で聞き取りも踏まえた本格的な仕事が登場してきますが、それに続く吉沢南 [1986]『私たちの中のアジアの戦争 仏領インドシナの「日本人」』がオーラルヒストリーという方法をはっきりと自覚した最初の作品と言えましょう。吉沢 [1986] は、戦後もベトナム等の旧仏領インドシナに残留した 4 人の「日本人」の経験を聞き取り、その戦前体験・戦後体験を明らかにしたものです。この作品は従来の歴史では抜け落ちていたいわば〈帝国の狭間〉で翻弄された人たちの戦前戦後を貫く「生きられた歴史」と言えましょう。

70 年代には社会史特集が組まれてきましたが、英米におけるオーラルヒストリーの復権をにらみ、1986 年に吉沢らを中心とする歴史学研究会はオーラルヒストリーに関するシンポジウムが開催され、本多勝一や澤地久枝というニュージャーナリズムにも着目し、それらを参照した「歴史学におけるオーラルヒストリー研究の可能性」を問いました。それら一連の活動は歴史学を越えて広く反響をえましたし、その成果は『歴史学研究』に特集されただけでなく、歴史学研究会編 [1988a]『オーラル・ヒストリーと体験史 本多勝一の仕事をめぐって』と、同編 [1988b]『事実の検証とオーラル・ヒストリー 澤地久枝の仕事をめぐって』という単行本として刊行されました。そして、それらはそれ以降のオーラルヒストリーの〈復権〉（第一段階から第二段階へと）をリードし、歴史学におけるオーラルヒストリー研究の展開を予感させました。それに引き続いて、『歴史学研究』では 2006 年、2013 年と 3 度にわたってオーラルヒストリーが特集され、大門正克が言うように、日本の歴史学、とりわけ現代史においてオーラルヒストリーの有用性は誰も否定しようがない状況になった、と言えましょう [大門 2007]。

しかしながら、後に検討しますように、この時期においても、第 1 期における歴史学におけるオーラルヒストリーである〈事実探求型のリカバリー・ヒストリー〉の域を出ず、オーラルヒストリーはあくまでも補助的なものという見方が依然として残りましたし、実証主義を旨とする歴史学は日本軍「慰安婦」問題において、いよいよそれは難しい問題を抱えることとなり、オーラルヒストリーが注目されながらも、それへの方法論において難しい問題を抱え、足踏み状況だったとも言えましょう。

（3）社会学におけるライフヒストリーの〈復権〉

社会学でも、柳田民俗学、有賀喜左衛門の農村社会学を引きつぐ中野卓や松本通晴を代表とする村落社会学者たちがいち早く生活史研究を切り拓らいていました。中野卓編 [1977]『口述の生活史』を嚆矢とし、中野の日本社会学会会長就任演説（ライフヒストリー宣言とも言えますが）を基とし

た中野〔1981〕「個人の社会的調査研究について」以降の中野の膨大な作品群と、松本らの庶民生活史研究会編〔1989〕『同時代人の生活史』等がその先駆けとなっていきます。社会学におけるこのような生活史やライフヒストリーは1978年という早い時期に発足した中野卓を中心とする「生活史研究会」において蓄積され、次代を担う桜井厚や有末賢を中心とするライフストーリーへと発展的に継承されました。

この間のライフヒストリー研究は中野・桜井編〔1995〕『ライフヒストリーの社会学』に結実されました。中野の演説以来わずか15年余りの間に社会学を中心としたオーラルヒストリー研究は、桜井が整理しただけでも300点にものぼり、この方法へ急速な関心が高まっていきました〔桜井1995b〕。

さて、フランス社会学を代表するダニエル・ベルトーによれば、この当時、日本同様に構造的数量的研究が盛んなフランス社会学においてライフストーリー研究を行うことは難しい状況にあったため、彼は英米の研究者と連携して1978年の国際社会学会第9回大会において初めて「個人史と社会」というセッションを申請して認められ、その参加者は100名を超える盛況だったといえます〔Bertaux 1997=2003〕。社会学における聞き取り／インタビューという方法は、戦前期の米国シカゴ学派では有力な方法でありながら、戦後は構造機能主義や計量社会学の全盛を迎え、長らく「劣った方法」と見なされていました。この「個人史と社会」セッションの盛況を契機として、社会学においてそのリバイバルを迎えたといえます〔同上〕。有末が指摘していますように、ベルトーらの企画は、期せずして中野や桜井の生活史研究会の発足（1978年）と同年であり、そのグローバルな同時性に驚かされます〔有末賢2012〕。

（4）政治史におけるオーラルヒストリーの〈継承〉

オーラルヒストリーが歴史学や社会学で80年代に復権していくのに反し、60年代70年代のオーラルヒストリーの中心にあった政治史はやや退潮し、少し間をおいて、伊藤隆や御厨貴を中心として90年代に再び活性化していきます。御厨の「公人の、専門家による、万民のためのオーラルヒストリー」という巧みな言い回しは衆目の関心を集め、御厨のマスメディアでの影響力もあり、「公人のオーラルヒストリー」は広く流通していきます。なによりも、伊藤や御厨らの「公人のオーラルヒストリー」の重要な貢献は、公人へのインタビューを行い、それを活字化してアーカイブ化するというスタイルを確立した点にあります。もっとも、朝鮮近代史資料研究会や内政史研究会もインタビューを活字化してその録音テープとともにアーカイブを先駆的に作成しましたが、伊藤や御厨の貢献はそのオーラルヒストリー・プロジェクトの企画からアーカイブ化までの一連の作業をシステム化し、「公人のオーラルヒストリー」を制度化したことにあります。政策研究大学院大学のオーラルヒストリー・プロジェクトのアーカイブ一覧だけでも79名の政治家、官僚、実業家といった「公人のオーラルヒストリー」アーカイブが作成されていますし、このような動きは政治史研究で大きな広がりをもっていきました。

そしてこのようなプロジェクトは、それを体系化した御厨〔2002〕によって、それに馴染みのある政策史、労働史、経営史だけでなく、科学技術史やオーラル・アート・ヒストリー等々、様々な分野においてオーラルヒストリー・プロジェクトとそのアーカイブ化を促進していきました。

5. オーラルヒストリーという困難とその〈深化〉(第三期)

(1) オーラルヒストリーという方法の深まり

御厨 [2002] がオーラルヒストリーからそのアーカイブ化までをシステム化したのに対し、桜井 [2002] はオーラルヒストリーという方法論を深く掘り下げました。

第二期の社会学におけるライフヒストリー研究、ライフストーリー研究の方法論を精緻化した桜井厚 [2002] 『インタビューの社会学』は、その内容の奥深さと時宜を得た刊行によって、社会学を越えて広く隣接領域にまで影響を与えました。というのも、第二期には人文・社会科学における言語論的転回という認識論のシフトが生じ、構築主義的な視点が前景化します。桜井は、現象学的研究を基礎としており、それらの大きな認識論におけるシフトをいち早く踏まえた「対話的構築主義」と名づけた方法を提唱しました。構築主義とは、何が事実かではなく、それがどう語られるかがポイントだという視点ですが、桜井はそれらを踏まえ、社会学におけるライフストーリー研究を、聞き取られた内容(「事実」)から従来の通説を書き直すという〈事実探求型のリカバリー・ヒストリー〉から、語りがどのように(how)語られたかを究明する研究へと大きくシフトさせていきました。このことは、桜井の偉さを示すだけでなく、社会学的オーラルヒストリー／ライフストーリーの構築主義との相性の良さも、大きく作用したと言えましょう。

(2) 日本における「歴史の再審」

このように日本のオーラルヒストリーは桜井と御厨という二人のリーダーをえて、社会学と政治史を中心に広く隣接科学を巻き込みながら展開していきました。しかし、オーラルヒストリーの〈復権〉を先導してきた歴史学は、言語論的転回や構築主義的な見方、「歴史の再審」、さらには歴史修正主義との対決を迎えて、1990年代は試練の時代となりました [桂 1999]。そこで、80年代から90年代に世界中で巻き起こった「記憶と歴史」に関する議論から、歴史学とオーラルヒストリーの関係性を概観してみましょう。

20世紀から21世紀へという世紀の転換を前にしたこの時期は世界的に「歴史の再審」がテーマとなり [上野 1998]、第二次世界大戦の記憶をめぐる論争が盛んに戦わされました。その代表的な例は「歴史家論争」であり、「ホロコースト論争」があげられましょう。ナチ・ドイツによるユダヤ人虐殺という歴史の記憶は、第二次世界大戦後の世界中で戦争の記憶／それへの反省を象徴するものとして語られてきました、それだけに歴史家論争でホロコーストという「事実」を否定する、あるいは相対化する議論が提起されたことへのショックは計り知れないものでありました。

これは、1989年のベルリンの壁崩壊や冷戦の終結、湾岸戦争(1991)、ボスニア・ヘルツェゴビナでの「民族浄化」という名の虐殺(1995)の再来など [柴 2005]、90年代に次々と起こる事件や世界秩序の変動を背景として、第二次世界大戦後に長らく続いた冷戦下の戦後体制のもとで抑圧されていた「事実」(や記憶)が問いただされたり、戦後の冷戦体制の下で長らく人びとの歴史観を規定していたものが「歴史の再審」にかけられたりしたと相俟って、ヨーロッパ社会に大きな衝撃を与えました。

そしてその衝撃はアジアにも波及し、アジア・太平洋戦争をめぐる社会的記憶の議論が日本でもアジアでも提起されました。その引き金は、1991年8月14日の元日本軍「慰安婦」の金学順のカ

ミングアウトでした。それによって慰安婦の被害が「問題化」され〔上野 前掲書〕、それはアジアにおける戦争の記憶に関する認識に地殻変動をもたらし、戦争被害に関する訴訟が急増し、日本政府はもとより関係民間企業がその対応に追われました。

(3) 日本における「記憶と歴史」論争

1) 言語論的転回という衝撃

このような「歴史の再審」論争の流れは、冷戦後の社会変動を背景とするだけでなく、言語論的転回による従来の認識論への根本的な批判とも関連していました。言語論的転回とは、哲学の基本的な方法が意識分析から言語分析へと転換したことを示し、言語はたんに探究のもっとも重要なテーマというだけにとどまらなくなったのです。言語はまた、魚や鳥にとって水や空がその住み場所であるように、探究そのものが生理的に成り立つためのエレメントなのです。すなわち、「言語は社会理解に必要な道具であるどころか、社会そのものが広い意味で言語的な存在なのである」とする見方で、人文社会諸科学に途方もない地殻変動をもたらしました〔吉見 2003〕。それは従来の実証主義が前提としていた（と思われていた）「客観的事実」、あるいはただ一つの「歴史の真実」という見方をも批判しました。上野千鶴子の有名な言葉を借りれば、「歴史に『事実 fact』も『真実 truth』もない、あるのはただ特定の視角から問題化され再構成された『現実 reality』のみだ」と〔上野 前掲書〕、実証主義史学を切って捨てました。

2) 歴史修正主義の衝撃

他方で、元日本軍「慰安婦」の「証言の衝撃」をめぐる論争の過程で、戦後日本社会の大きな伏流としてあった戦後の公式の歴史観（パブリック・ヒストリー）への反発がこの前後から公然と表面化してきました。それは「歴史の再審／修正」を目指す「自由主義史観」として、具体的には「新しい歴史教科書を考える会」（1997年発足）に代表される戦後の公式の歴史観を規定した「東京裁判史観」への反発（修正要求）であり、その頃に問題化された日本軍「慰安婦」問題や南京大虐殺問題を問い直し、戦後、とりわけ冷戦後強まったとされた「自虐史観」を「修正」すべく活動していきました。

このことは、戦後歴史学の系譜のなかにある実証主義者にショックを与え、実証主義者は修正主義との対峙を余儀なくされました。これは、いわば「歴史の再審」に対して「歴史の修正」と称され、戦争被害、戦後処理問題をめぐる認識の対立が、「歴史と記憶」をめぐる認識だけでなく、当然ながら実証主義という方法論の問題性にも波及し、それは複雑な様相を呈したのでした〔上野 前掲書〕。

(4) オーラルヒストリーのなかの実証主義と構築主義

1) 「証言」と歴史

元日本軍「慰安婦」の出現と「証言」は日本社会ひいてはアジア社会に大きな衝撃を与え、そのことをめぐるパラダイムが転換され、それは社会「問題化」されていきました。そして日本社会も歴史学も大きく揺さぶられました。戦後歴史学の系譜をひく吉見義明はその「証言」を真摯に受けとめ、それを裏付ける実証的な資料探しに奔走し、『従軍慰安婦』〔1995年〕を上梓しました。他方で、歴史修正主義者はその「証言」の信憑性や歴史の実証性に根本的な疑問を投げかけ、吉見の研究を批判していきます。

ここでの議論は、日本軍「慰安婦」の証言の証拠性や南京大虐殺に関する資料が歴史資料として信頼性や信憑性があるのかという「実証主義上の論争」となっていました。これに対して、先の上野の言葉に象徴されますように、構築主義は、歴史実証主義も歴史修正主義もその双方が文書至上主義を前提としている点を批判し、元日本軍「慰安婦」の語りが従来の視点（パラダイム）を転換させたことの重要性をクローズアップしました。

この「記憶と歴史論争」をオーラルヒストリーに引きつけますと、それは「証言と歴史」問題となり、元日本軍「慰安婦」の「証言」の証拠性や実証性が問題化され、指弾されていきました。そしてこの論争は、オーラルヒストリーにおける口述資料の〈a 客観性、b 信頼性、c 語り手の代表性、d 語りの再現可能性〉という4つの問題をクローズアップしていきました。このオーラルヒストリーに関する4つの問題に関しては、中村政直が歴史学の立場から簡潔に解説しており、それに付け加えるものは何もあります [中村 2003]。ただ、この論争後 30 年余りが経っている今日でも、若い歴史学研究者のなかにおいてこの「証言と歴史」問題は依然として燻ぶっており、歴史学においてそれは乗り越えられた課題とは思えません。

2) 『ショアー』の衝撃

このような「記憶と歴史」、「証言と歴史」論争に別の視点を投げかけたのがクロード・ランズマンの『ショアー』でした。クロード・ランズマンによって「記憶の語り」を中心に据えたドキュメンタリー映像作品の『ショアー』（1985）が制作公表され、『『ショアー』の衝撃』ともいえるものが世界中を走りました [鶴飼・高橋 1995]。日本でも、1995 年 1 月に『ショアー』が上映されると、「記憶と歴史」をめぐる議論が盛んに闘わされるようになりました。たとえば、鶴飼哲・高橋哲哉編 [1995] 『『ショアー』の衝撃』はその代表作で、それを介して多様な議論が展開されました。

ここで『ショアー』をオーラルヒストリーに引きつけて論じますと、何よりも『ショアー』がホロコーストの証人の語りを文字ではなく、9 時間半という長時間の映像のなかで証人たちに語らせた点にその大きな特徴があります。鶴飼は、ランズマンによる 1975 年から 85 年までの 11 年間という長時間の作品の制作過程のなかで初めて浮かび上がってくる「記憶の層」を重視します。また、語られる言葉、表情、間合い、沈黙をフィルムに収めることで、30 年前の過去と現在とがつながると言います。映像のなかで語られる言葉の重さは言うまでもないですが、その表情、間合い、息づかい、そしてその沈黙が、語られることとその背後にある「語りえぬこと」も我々に感受させ、それらが語りとともに証人の体験を雄弁に物語っていることを喝破します [鶴飼 1995]。

そして、ランズマンが一人の人間に徹底的にこだわることでしかホロコーストが表現できないという一見逆説的な視点を示したこと、また語られたことが仮に「事実」と異なっているとしても、それも他の何かを物語っていることに鶴飼は着目しました [鶴飼 前掲書]。

他方、宇野淳子は映像の撮り手と語り手の相互作用性に注目し、映画のなかでの証人の語りが証言というよりも「思い出語り」であり、過去の記憶を忠実に記憶の貯蔵庫から引っ張り出すというよりは、過去の経験を踏まえて想起される「今」の自分の感情・評価が吐露されていると指摘しており、桜井のライフストーリー論と響きあっています [宇野 2012]。

3) 実証主義か構築主義か

このような議論を振り返りますと、元日本軍「慰安婦」問題では口述資料の〈a 客観性、b 信頼性、c 語り手の代表性、d 語りの再現可能性〉という実証主義的な問題がクローズアップされ、他方で

「ショアー」の衝撃では、それが文字資料ではなく映像であることが加味されて、その証言における事実性や実証性よりも、〈撮り手と語り手によって紡ぎ出される（共同としての）語り（ナラティブ）と沈黙〉、そして〈たった一人の語り〉がクローズアップされました。

このコントラストは、何（what）を語るかという体験の事実性の側面と、それをどのように（how）語るかという体験に関する記憶の構築性や語りの対話的構築性の側面の違いと言えましょう。宝月理恵は、言語論的転回以降、オーラルヒストリーは実証主義的な視点から構築主義的な視点へと移行していったといいますが〔宝月 2013〕、90年代の「記憶と歴史」に関するいくつかの論争では、たしかに重心は構築主義的な視座へと移っていきましたが、両者は依然として対立し、拮抗しつつも、併存していると言えましょう。とりわけ日本の歴史学においてはそう言えるでしょう。

先駆的オーラルヒストリー（第一期）においても、その復興期・継続期のオーラルヒストリー（第二期）においても、歴史学と実証主義がその中心にありました。しかし、言語論的転回に加え、元日本軍「慰安婦」論争での歴史修正主義の挑戦という90年代に矢継ぎ早に生じた新たな出来事によって歴史学は衝撃を受け〔小田中 2001〕、オーラルヒストリーという方法への信頼と躊躇とが混在していました。その一方で、桜井厚に代表される社会学においては、ライフヒストリー、ライフストーリー研究は、復興から深化へと一気につき進んでいきました。

さて、「公人のオーラルヒストリー」を御厨とともに牽引してきた伊藤隆の議論を短く振り返ってみましょう。伊藤は政治史（歴史学）の泰斗で、60年代からオーラルヒストリーを実践してきた大ベテランでして、そのオーラルヒストリー論は経験に即したもので、際立っているからです。伊藤は、オーラルヒストリーの利点を、①語り手に直接質問できる双方向性、②当事者から文献資料の背景や解釈を聞けること、③文献に書いていない多くの事実を聞く可能性があること、そして④インタビューの過程で関連の資料を提供してもらえること、等々をあげています〔伊藤 2009〕。そして、伊藤は、長年の聞き取り経験から、共通の体験でも人によってその記憶が異なっているように（「羅生門の現実」の語り）、記憶の不正確さや曖昧さがあること、さらには「人間は絶えず新しい状況の下で自己の過去というものを再整理して、それによって自己の再確認をして生きている」から、過去の体験は今日の状況、今日の価値によって変形され、解釈され直され、不都合な部分は記憶から排除されていることを喝破します。とりわけ、敗戦を経て戦前から戦後と社会の価値観が大きく変化する場合、〈記憶の再解釈〉が色濃く見られることを指摘しています〔伊藤 前掲書〕。この点は御厨も同様で、伊藤同様に、語られる社会的文脈とそれを踏まえた解釈の重要性を強調しています。このように伊藤・御厨は、オーラルヒストリーにおける「羅生門の現実」の語り、記憶の再解釈、語られる社会的文脈の重要性、それに聞き手との相互作用性という構築主義の指摘する側面も十分認識しています〔御厨 2007〕。

しかし、このようなオーラルヒストリーにおける重要な4つのポイントを共有しているにもかかわらず、一方で桜井はオーラルヒストリー／ライフストーリーを〈証言〉としてではなく〈物語〉の部分重視しますが〔桜井前掲書〕、伊藤や御厨は事実性にこだわり、それを厳しい史料批判や社会的な文脈を踏まえた解釈が必要なことを強調します〔伊藤 前掲書〕。その主張は、政治史（歴史学）にとっては史資料が第一で、オーラルヒストリーは史資料の欠損を埋めるために行われる二次的で補完的なものであり、語られた口述資料の資料的な価値は、他の史資料と付き合わされて初めて価値のある「証言」として確認されるという従来のスタンスと変わりません。これを伊藤や御

厨における実証主義と構築主義の混在、あるいは方法論的な矛盾とみるのは皮相でしょう。彼らの「公人のオーラルヒストリー」の積み重ねられた経験から、政治史においてオーラルヒストリーが有用であるという認識に揺るぎはありませんし、語りの構築性を認識しつつも、方法論的な実証主義を捨てないという基本視点は、ある意味で現実的とも言えましょう。

6. 結びにかえて——オーラルヒストリーの課題と今後

最後に、オーラルヒストリーという課題の現実的な乗り越え方を検討していきましょう。

(1) 「語りをめぐるジレンマ」の乗り越え方

1) 荻野美穂の場合

通常の歴史学においてオーラルヒストリーをどう捌くかは簡単ではありませんでした。しかしたとえば、荻野は上野の実証主義批判に対して、歴史の構築性や「歴史の再審」という視点はなにも構築主義の専売特許ではなく、従来の歴史学のなかでもすでに共有されていた見方であることをつとに指摘しています。また、構築主義に影響を受けた女性史の展開を検討するなかで構築主義を原理主義的に推し進めるのではなく、また歴史相対主義に対してもその際限のない相対化が懐疑主義という陥弄へ陥りかねないことを指摘します。すなわち、荻野は構築主義を柔軟に受け入れつつも実証主義との折衷主義的な対応が現実的であることを説得的に指し示しています〔荻野 2000〕。

2) 松田素二の場合

桜井ライフストーリー論を批判的に検討する松田素二も、原理主義的な構築主義を批判し、桜井と解釈学的方法論の代表であるベルトーの共通点を確認して、新たなライフヒストリー論の展開の可能性を指示しました。松田は、ライフストーリー法に要請されるものは、(1) 個に深く依拠する一方で集合的カテゴリー（マスター・ナラティブやモデル・ストーリー）の生成を射程に入れられるか、(2) 個人のライフストーリー研究は、マクロな世界システムや社会構造を見通すことができるかにあり、桜井は個人レベル、集合レベル、マクロな社会を視野に入れており、桜井の方法がベルトーらの解釈的方法と鋭く対立するのではなく、むしろ両者の共通性に着目します。

荻野が構築主義を半ば受け入れ半ば実証主義にこだわり折衷的に現実的に対応したように、松田も桜井の対話的構築主義を原理主義的に受け取るのではなく、桜井の作品から過去の体験に関する実証性を認めつつも、記憶のされかたや語られ方における構築性に着目するという複眼的視点を強調します〔松田 2013〕。

3) 大門正克の場合

歴史学におけるオーラルヒストリーを牽引してきた大門正克は『語る歴史、聞く歴史』〔2017〕のなかで、このジレンマの乗り越え方を軽やかに指し示しています。すなわち、大門は、聞き取りの現場での対面性や身体性へと着目しました。これらはこれまで社会学等では繰り返し論じられてきたことですが、これを歴史学の中心で活躍してきた大門が記すことは大きな意味がありました。というのは、歴史学はディシプリンの特性から資料作成に禁欲的であり、聞き取りの科学性（客観性、信頼性、代表性、再現可能性）へのこだわりを捨てきれなかったのです。しかし大門は、「耳をす

まし経験を聞きとる」だけでなく、聞き取りの現場における聞き手が語り手から受ける衝撃、聞き手の積極的な役割、双方の相互作用性などを含めて、重視します。さらには、従来の文献資料にもとづく歴史叙述では「研究者の認識の変化は行間の奥底にしまって書かれないことが洗練された研究とされて」きましたが、『語る歴史、聞く歴史』では、「語り手の語りを受けとめ、聞くことの意味を考え、自らの認識を反芻して更新しようとする」ことを重視しました。その最大の眼目は「歴史学の方法を問い直す」ことであり、その背後仮説となっている「歴史の時間と空間への問いを呼び起こし、歴史の叙述自体を再検討すること」だと宣言します。

大門は、オーラルヒストリーの方法を (a) 記録を重視するものと、(b) 文字に残らない／残りにくい歴史をめぐって経験を聞くもの、とに分類します。そして後者の「聞く歴史と叙述を通してはじめて、歴史の奥底に沈み、さまざまな抑圧や生活の困苦のなかで見えにくくなっていた人びとの経験がようやく姿をあらわすことになった」と指摘しています。自身の聞き取りの現場での経験を真摯に振り返り、現場で「想定外の話」に遭遇し語りに魅了されていったこと、テーマの聞き取りから人生の聞き取りへと深まったこと、しかし語ってもらえない経験と苦闘したこと、等々を赤裸々に綴っています。

「沈黙にはさまざまな思いがあるだろう。話の内容の整理や逡巡、決断のあとに、沈黙を破る声が出てくる。聞き取りで語り手が沈黙すると、私はできるだけ呼吸を合わせ、語り手が話し始めるのを待つようになった。聞くということには相手に尋ねる ask と相手の話に耳をすます listen の二つがあることを理解した」、「人が話すということは、話し方や表情、身振り、手振り、沈黙、感情などの身体的行為と一体である」こと、「声に耳を傾けるということは、身体的行為を含めてまるごと受けとめることにはほかならない」[以上、大門前掲書]と記しています。このように、大門は、歴史学における語りをめぐるジレンマを越えるための指針を『語る歴史、聞く歴史』で明快に示しています[蘭・蘭 2019]。

(2) 東アジア・オーラルヒストリー・アーカイブの構築を目指して

最後に、両先生の報告からもわかりますように、韓国や台湾におけるオーラルヒストリーは、そのアーカイブ化にかなりの蓄積があります。日本でも「公人のオーラルヒストリー」だけでなく、様々な領域においてそのアーカイブ化が試みられております[『JOHA 研究』15号]。今後は、国を越えた「東アジア・オーラルヒストリー・デジタル・アーカイブ」の構築が一つの課題になるかと思います。そのための研究交流、共同研究、共同の企画が望まれると思います。

最後にこのことを提案して、私の報告を終わらせていただきます。長時間のご清聴、ありがとうございました。

[付記] 本稿は、蘭 [2016]、蘭 [2018]、蘭信三・蘭由岐子 [2019]、蘭 [2021]、蘭 [2022] を参照し、蘭 [2015] を大幅に加筆修正したものです。なお、本報告原稿を作成するに際し、蘭由岐子に様々なアドバイスをいただきました。記して感謝申し上げます。

〔参考文献〕

- 安仁屋政昭, 1988, 「沖縄戦を記録する」(歴史学研究会編『事実の検証とオーラル・ヒストリー 澤地久枝の仕事をめぐって』青木書店).
- 蘭信三, 2007, 「中国「残留」日本人の記憶の語り——語りの変化と「語りの磁場」をめぐって」山本有造編『満洲 記憶と歴史』京都大学学術出版会.
- , 2008, 「戦後日本社会と満洲移民体験の語りつぎ」浜日出夫編『戦後日本における市民意識の形成 戦争体験の世代間継承』慶應義塾大学出版会.
- , 2013, 「満洲引揚者のライフヒストリー研究の可能性——歴史実践としての『下伊那のなかの満洲』」福岡良明他編『戦争社会学の構想 制度・体験・メディア』勉誠出版.
- , 2015, 「オーラルヒストリーの展開と課題 社会学と歴史学の狭間から」『岩波講座 日本の歴史 21』岩波書店.
- , 2016, 「ライフストーリーによる社会学的歴史研究の可能性」『近代日本研究』33 卷.
- , 2018, 「戦時性暴力被害を聞き取るということ」上野千鶴子・蘭信三・平井和子編『戦争と性暴力の比較史へ向けて』岩波書店.
- , 2021, 「方法としてのインタビュー」『コスモポリス』No.15.
- , 2022, 「身体化された軍隊経験」を振り返る」『思想』5 月号、岩波書店.
- ・蘭由岐子, 2019, 「書評 大門正克, 2017, 『語る歴史、聞く歴史——オーラル・ヒストリーの現場から』岩波書店」『歴史評論』833 号.
- 蘭由岐子, 2014=2004, 『病いの経験を聞きとる』生活書院.
- 有末賢, 2012, 『生活史宣言 ライフヒストリーの社会学』慶應義塾大学出版会.
- Bertaux, Daniel, 1997, *Les récits de vie : Perspective ethnosociologique*, Nathan (= 2003, 小林多寿子訳, 1981=2003, 『ライフストーリー——エスノ社会学的パースペクティブ』ミネルヴァ書房).
- 江頭素子, 2009, 「社会学とオーラル・ヒストリー」法政大学大原社会問題研究所編後掲書.
- 江藤淳編, 2000, 『水川清談 勝海舟の談話筆記』講談社.
- 遠藤美幸, 2014, 「『戦場体験』を引き受けるということ ビルマルートの拉孟全滅戦の生存者を訪ね歩いて」高文研.
- Holstein, James A, & Gubrium, Jaber F, 1995, *The active interview*, SAGE Publications, Inc (= 2004, 山田富秋・兼子一・倉石一郎・矢原隆行訳『アクティブ・インタビュー——相互行為としての社会調査』せりか書房).
- 橋本みゆき, 2008, 「ウェブサイト「川崎在日コリアン生活文化資料館」が展示するもの」東京外国語大学多言語多文化教育研究センター『多言語多文化——実践と研究』vol.1.
- 浜日出夫・有末賢・竹村英樹編著, 2013, 『被爆者調査を読む——ヒロシマ・ナガサキの継承』慶應義塾大学出版会.
- 人見佐知子, 2013a, 「聞き取り・わたし・認識構造」『歴史学研究』912 号.
- 人見佐知子, 2013b, 「芦屋市精道国民学校の学童疎開にみる「子ども時代の戦争体験」」甲南大学人間科学研究所『紀要』vol.14.
- 東谷智, 2010, 「戦争体験の聞き取りと記録化——歴史学の立場から」甲南大学人間科学研究所『紀要 心の危機と臨床の知』Vol.11.
- 宝月理恵, 2013, 「戦前・戦後期日本の「衛生経験」を読み解く——オーラル・ヒストリーによる近代衛生史の可能性」『歴史学研究』912 号.
- 保莉実, 2004, 『ラディカル・オーラル・ヒストリー——オーストラリア先住民アボリジニの歴史実践』御茶の水書房.
- 法政大学大原社会問題研究所編, 2009, 『人文・社会科学研究とオーラル・ヒストリー』御茶の水書房.
- 兵庫解放教育研究会編, 1975, 『はるかなる波涛 在日朝鮮人生徒の再生にかけて』明治図書出版.
- 石原昌家, 2013, 「沖縄戦と米軍占領のオーラルヒストリー——証言をどう読み取るか」神奈川大学民俗学研究所『歴史と民俗』29 号、

平凡社.

板垣竜太・戸邊秀明・水谷智, 2010, 「日本植民地研究の回顧と展望——朝鮮史を中心に」『社会科学』第40巻2号.

伊藤隆, 1993, 「木戸日記研究会の解散」『日本の歴史』536号.

——, 2009, 「歴史研究——とオーラルヒストリー」法政大学大原社会問題研究所編、前掲書.

伊藤康子, 2013, 「地域女性史と聞き書き」『日本オーラル・ヒストリー研究』第9号.

姜徳相, 2006, 「インタビューとアーカイヴ問題——その実証性をめぐって」『歴史学研究』813号.

金菱清編, 2012, 『3.11 慟哭の記録』新曜社.

川島大輔, 2013, 「インタビューの概念」やまだようこ他編『質的心理学ハンドブック』新曜社.

小林多寿子, 2013, 「『福翁自伝』におけるオーラルティと多声性——声の分析の試み」山田富秋・好井裕明編『語りが拓く地平——ライフストーリーの新展開』せりか書房.

児島恭子, 2004, 「アイヌ史研究とオーラル・ヒストリー」『歴史評論』648号.

駒込武, 2005, 「『帝国のはざま』から考える」『年報・日本現代史10「帝国」と植民地』現代資料出版.

倉敷伸子, 2009, 「女性史研究とオーラル・ヒストリー」法政大学大原社会問題研究所編、前掲書.

栗木千恵子, 2011, 「オーラル・ヒストリーが1970年代において「女性の問題」に果たした役割」『人文学部研究論集』第26号.

Lewis, Oscar, 1961, *The children of Sánchez: autobiography of a Mexican family*, Random House (= 1969, 柴田稔彦・行方昭夫共訳『サンチェスの子供たち——メキシコの一家族の自伝』みすず書房).

満蒙開拓を語りつぐ会編, 2003～2012, 『下伊那のなかの満洲 聞き書き集(第1～10集)』飯田市歴史研究所.

満洲泰阜分村ー七〇年の歴史と記憶編集委員会編, 2007, 『満洲泰阜分村ー七〇年の歴史と記憶』不二出版.

松田素二, 2013, 「現代社会の解釈ツールとしての桜井式ライフストーリー法——滋賀県・湖西・湖東の調査から」山田富秋・好井裕明編『語りが拓く地平——ライフストーリーの新展開』せりか書房.

松村高夫, 2006, 「歴史認識論と「歴史認識問題」」『三田学会雑誌』98巻4号.

御厨貴, 2002, 『オーラル・ヒストリー 現代史のための口述記録』中公新書.

——, 2007, 「オーラル・ヒストリーとは何か」御厨編『オーラル・ヒストリー入門』岩波書店.

三代純平編, 2015, 『日本語教育学としてのライフストーリー 語りを聞き、書くということ』くろしお出版.

文部科学省科学技術政策研究所第二グループ 上野彰・永田晃也編, 2010, 『オーラル・ヒストリー研究の科学技術政策分野への応用に関する検討』同研究所.

森亜紀子, 2013, 『日本統治下南洋群島に暮らした南洋移民——いま、人びとの経験と声に学ぶ』新月舎.

中村政則, 1976, 『労働者と農民』小学館.

——, 2003, 「言語論的転回以後の歴史学」『歴史学研究』779号.

中野卓編, 1977, 『口述の生活史』御茶ノ水書房.

中野卓, 1981, 「個人の社会的調査研究について」『社会学評論』第32巻2号.

中野卓・桜井厚編, 1995, 『ライフヒストリーの社会学』弘文堂.

野上元, 2009, 「歴史と向き合う社会学——資料と記述をめぐる多様なアプローチに見る可能性」『年報社会学論集』22号.

荻野美穂, 2001, 「歴史学における構築主義」上野編前掲書.

大濱徹也, 2002, 『日本人と戦争——歴史としての戦争体験』刀水書店.

大門正克, 2009=2007, 「オーラルヒストリーの実践と同時代史への挑戦——吉沢南の仕事を手がかりに」法政大学大原社会問題研究所編『人文・社会科学とオーラル・ヒストリー』御茶の水書房.

——, 2017『語る歴史、聞く歴史』岩波書店.

- 大山信義, 1987, 「反省理論としての生活史」『現代社会学』第13巻2号、アカデミア出版会.
- 沖縄女性史研究会編, 2013, 『沖縄と満州』明石書店.
- 折井美耶子, 2011, 「地域女性史とオーラル・ヒストリー」『日本オーラル・ヒストリー研究』第7号.
- Ong, Walter J & Hartley, John, 1982, *Orality and literacy: the technologizing of the word*, Routledge (= 1991, 桜井直文・林正寛・糟谷啓介訳『声の文化と文字の文化』藤原書店).
- 歴史学研究会編, 1988a, 『オーラル・ヒストリーと体験史 本多勝一の仕事をめぐって』青木書店.
- , 1988b, 『事実の検証とオーラル・ヒストリー 澤地久枝の仕事をめぐって』青木書店.
- 坂部晶子, 2008, 「重層的被支配の狭間の経験——台湾から満洲へ」蘭信三編著『日本帝国をめぐる人口移動の国際社会学』不二出版.
- 酒井順子, 2002, 「訳者あとがき」トンプソン, ポール (酒井順子訳) 『記憶から歴史に オーラル・ヒストリーの世界』青木書店.
- , 2004, 「私の「ライフヒストリー」体験と日本における「オーラル・ヒストリー」の発展の可能性」『東京外国語大学史資料ハブ／シンポジウム』.
- 桜井厚, 1995, 「ライフヒストリー研究文献目録」中野卓・桜井厚編『ライフヒストリーの社会学』弘文堂.
- , 2002, 『インタビューの社会学 ライフストーリーの聞き方』せりか書房.
- , 2005, 『境界文化のライフストーリー』せりか書房.
- , 2006, 「オーラル・ヒストリーの対話性と社会性」『歴史学研究』811号.
- , 2010, 「「事実」から「対話」へ——オーラル・ヒストリーの現在」『思想』1036号.
- , 2012, 『ライフストーリー論』弘文堂.
- 清水透, 2006, 「フィールドワークと歴史学」『歴史学研究』811号.
- 庶民生活史研究会編, 1989, 『同時代人の生活史』未来社.
- 高橋哲哉, 2001, 『歴史／修正主義』岩波書店.
- Thompson, Edward P, 1963, *The making of the English working class*, V. Gollancz (= 2003, 市橋英夫・芳賀健一訳『イングランド労働階級の形成』青弓社).
- Thompson, Paul, 2000, *The voice of the past: oral history*, Oxford University Press (= 2002, 酒井順子訳『記憶から歴史へ——オーラル・ヒストリーの世界』青木書店).
- トンプソン, ポール [酒井順子訳], 2004, 「ポール・トンプソン氏に聞く オーラル・ヒストリーの可能性を開くために」『歴史評論』648号.
- 富永貴公, 2007, 「ラスキン・カレッジのカリキュラム及び試験制度への学生の関与——1960年代の Affluent Workers 論への対抗的価値」『神戸大学発達科学部研究紀要』14巻2号.
- 鳥山淳, 2006, 「沖縄戦をめぐる聞き書きの登場」倉沢愛子ほか編『岩波講座 アジア・太平洋戦争 6 日常生活の中の総力戦』岩波書店.
- 『大正初期山縣有朋談話筆記——政変思い出』山川出版社, 1981.
- 上杉忍, 1988, 「アメリカにおけるオーラル・ヒストリーの現状とその成果」歴史学研究会編『事実の検証とオーラル・ヒストリー 澤地久枝の仕事をめぐって』青木書店.
- 上野千鶴子, 1998, 『ナショナリズムとジェンダー』青土社.
- 上野千鶴子・蘭信三・平井和子編, 2018, 『戦争と性暴力の比較史へ向けて』岩波書店.
- 上野輝将, 2005, 「「ポスト構造主義」と歴史学——「従軍慰安婦」問題をめぐる上野千鶴子・吉見義明の論争を素材に」『日本史研究』509号.
- 内海愛子, 1982, 『朝鮮人B C級戦犯の記録』勁草書房.

- , 2012, 「書評 鵜飼哲＋高橋哲也編『「ショアー」の衝撃』」『GCAS Report Vol.1 (学習院大学大学院人文科学研究科)』.
- 山田富秋・好井裕明編, 2013, 『語りが拓く地平 ライフストーリーの新展開』せりか書房.
- やまだようこ編著, 2000, 『人生を物語る——生成のライフストーリー』ミネルヴァ書房.
- 山村淑子, 2004, 「地域女性史とオーラル・ヒストリー」『歴史評論』648号.
- 山本唯人, 2012, 「学知の生まれる場所—東京大空襲・戦災資料センターの試みから」『日本オーラル・ヒストリー研究』第8号.
- 安田常雄, 1979, 『日本ファシズムと民衆運動 長野県農村における歴史の実態を通して』れんが書房新社.
- 吉田禎吾, 1986=1957, 「解説——自伝の文化人類学的意義」ルイス, オスカー同上書.
- 吉見俊哉, 2003, 『カルチュラル・ターン、文化の政治学へ』人文書院.
- 吉見義明, 1995, 『従軍慰安婦』岩波新書.
- 吉沢南, 1986, 『私たちの中のアジアの戦争 仏領インドシナの「日本人」』朝日新聞社 (吉沢南, 2010, 『私たちの中のアジアの戦争 仏領インドシナの「日本人」』有志舎).
- 友邦協会編『朝鮮近代資料集成』(全四巻).

(あららぎ しんぞう, 大和大学・上智大学／aragishinzo@gmail.com)